

## 会津から裏磐梯の桧原を越えて米沢へ（山形県）

注（ ）は割注部分

出羽、越後を測った第三次測量は、享和2年（1802）6月11日（陽暦7月10日）江戸を發って、6月29日には会津の塩川宿に着く。翌1日は大風雨だった。

七月朔日 塩川逗留。朝より五ッ後迄風雨。雨止猶大巽風夜に至る。夜五ッ頃より大雨。暁に至る。

例外はあるが、雨天は測量を中止して順延。室内でデータの整理、下図の制作などに当たった。

同二日 朝曇。六ッ後、塩川出立。行路右田地一里半程、左田地山根迄三里斗もあるべし。則会津領北方の八万石なり。（東別府村）、下小出村、上利根川村、（宮の目村）・中の目村（此辺右山根へ一里斗、左山根へ三里斗）、舞台田（熊倉端郷、右山根へ近半里斗）。塩川より一里二十八丁熊倉宿（五ッ半頃に着休、天氣に成、四ッ頃に立）、出口に大塩川あり。先に而塩川も落合。高柳村（此辺山際之様に成。併、厩岳の麓へ七八丁もあるべし。左山根へ遠は三里、近山は二里弱）、館村・関屋村（左右山に而段々上る）、樟村（又は柵村とも云由。此所左右山なり。左を望ば田地広、山連る。大凡戌未に当る。右は山々に而田地なし）、

これでは地形偵察で、まさに情報収集。村役人の経験がある忠敬の眼でみたら、米の収穫も確実に把握出来たろう。こういう記述が多かったら、隠密がましいといわれても仕方がない。

しかし、こういう表現は日記のなかに殆ど見当たらない。大変珍しい部分である。そして、記録から感じるのは、この頃には忠敬は、測量実務を隊員に殆ど任せていたということである。第3次からは、幕府公用に準じて、旅行用人馬や応援の人足が格段に強化されていた。

大塩の地内に而、高曾弥山を測る（子二十二分二十秒）、会津領四高山之内（一に飯豊山・二に東山・三に磐梯山・四に高曾弥山）なりと云。熊倉より一里十二丁、大塩宿（会津領）九ッ後に着。止宿穴沢源吉（此所検断問屋兼帯）、芦名の属に而旧家なるよし。

大塩で会津4高山の1つ高曾弥山を測る。宿舎の穴沢家は芦名家につながる旧家で、今でも検断屋敷跡の碑があるという。而は（て）と読む。

此村谷合に而塩の沸井あり。釜六七に而塩を炊家あり。此しほ、会津侯の用意にして売買をせずと云、（塩炊ものに尋問は、一釜へ塩水二石を入、五釜十石の水に而塩五斗を取と云。大塩は高千石斗。家百五十軒余）、服部善内見廻に来る。翌朝も同（大塩入口に亀甲坂と云あり 左右石悉亀甲なり）。

大塩には谷間に塩水の湧く井戸があって、釜が数個あり塩水を煮詰めて塩をとっていた。会津藩向けで他には売らない。塩炊きに尋ね問うてみたところ、1釜に2石あて、5釜に塩水を入れ、10石の塩水から塩が5斗とれるという。

忠敬は好奇心旺盛で、話を聞いて早速数字を確かめ、記録しているところが面白い。山間の集落ながら高千石、150軒は大きい。製塩のお陰だろう。服部善内は郡役所の物書きという。藩命を受け、村役人を指導し朝夕挨拶に出たのだろう。

同三日 朝霧探し。五ッ前大塩出立（一里四丁二十間、桧原宿塚に至る。それより一里四丁四十間）、合二里九丁、桧原宿 会津領 四ッ半後に着。此日両駅の間、山道に而、佐原（より）湯殿山参詣の者に出逢、佐原へ書簡を遺す。測量者は九ッ後に着。服部善内、止宿へ見廻に来る。

両宿の間山中に而、峠谷合、又大塩川流に添、左右共高山おほし。此村は溪間に而田畑なし。若松城下へ椀其他挽物の下地をなして家業とす。一同家作よし。泊屋も余程あり。止宿問屋喜兵衛。

大塩から檜原へ。途中の峠の茶屋で、湯殿山参詣帰りの佐原の人達に出会い、佐原への文を託した。道は山間の川沿いで、左右に高い山が多かった。この村には田畑はなくて、お椀其他挽物などの仕事をしている。それなのに一同家作よしという。家並みが立派なのである。湯殿山詣りの佐原衆に出会ったというから、関東から会津、米沢方面へ向かう街道の宿場と、職人稼ぎの村だったらしい。

同四日 朝曇。六ッ半頃桧原出立（此朝も服部善内止宿へ見回に来る）、一里十九丁、奥州羽州の塚則桧原峠に至る。是迄会津領奥州耶麻郡なり。服部善内並桧原宿役人送来る。是より則出羽国置賜郡にて米沢領なり。同領綱木宿役人も桧原峠領界迄出迎待居（峠より一里十丁）、合二里二十九丁、綱木村（米沢領初）、四ッ半前に着。桧原より谷間、又上下險岨なり。桧原大峠より下りは屈曲おほく、別して峻し。それより中峠、小峠あれ共易し。止宿問屋検断兼帯、中川久四郎（上杉家より佩刀を免さる。此所家六十軒斗、此春二月に半類焼）。夜曇。不測。

6つ半に桧原を出発して、1里19町で米沢領（出羽）との境の桧原峠に出る。服部善内および桧原村の役人はここまで送ってきた。役人だけでなく、荷物を運ぶ桧原村の人足もここまで送ってきた筈である。

綱木村（米沢領）の役人も出迎えて待っていたということは、交代して荷物を運ぶ人足もつれてきたと考えられる。同一領内の場合は、村同士の話し合い、または測量隊の希望で宿まで通し人足ということもあったが、領主が違う場合は領界で人足交代が普通だった。

峠からは屈折の多い険しい道筋だったというが、山中の国境に大勢の人足を連れ込んで荷物の受け渡しは大騒ぎだったろう。下見をして広めの場所に小休所などを予めセットしていたに違いない。この道筋は現在では、磐梯山の噴火で出来た桧原湖があって湖底に沈んでいる。

**同五日** 朝晴、無程曇る。六つ半頃綱木村出立（二十丁余に而、綱木村と関町界になら坂峠あり）一里十八丁関町（又は関村、此村家二十六軒と云）、駅場なり。立石村（元は関村羽郷なりしに、今別村となれりと云へり）、李山村、谷が下村（大村にて、所々に家居す）、笹野村（関町より二里十九丁）、米沢城下 上杉弾正大弼居城、東町九つ半後に着。止宿遠藤孫左衛門。家作よし。城下入口より徒士先払、町役人案内、止宿へ米沢家士今泉元四郎見廻に来る。（仙台輝宗侯古城跡は米沢西一里余に山あり。今は館山と云と）、此夜雲間測量。

米沢城下には昼過ぎについたが、城下町の入り口から、お徒の侍が先払い（隊列の先頭を進み、どいた、どいたと、順路を確保する役。町同心、郡同心、あるいは村役人が脇差を帯刀して務めた）を務め、町役人が忠敬の傍らに付き添って案内をした。

宿は遠藤孫左衛門で、ここに藩士の今泉元四郎が挨拶に出た。後年なら、ここで藩侯から使者が出て口上を述べ、進物を差し出したが、この頃はそこまでの扱いはなかった。しかし、第2次測量と対比すると格段の出世である。